中国あれこれ

（日本原子力研究所）成田　孟

この度、研究者の国際交流制度の一環として、１９９２年１０月中旬より１１月初旬まで約３週間、中国の研究所や大学を訪問する機会を得た。また、１０月１９日～２２日に北京で開かれた第１３回ＣＯＤＡＴＡ会議に出席した。最初の１週間を除いて、残り約２週間は核データセンターの深堀氏と同行した。中国での核データの活動や研究所および各大学での核データの活動状況は、すでに諸先輩により核データニュース No.36、40、41 に掲載されているので、ここでは、深堀氏との弥次喜多道中記も含めて、日本と「一衣帯水」の関係にある中国での滞在中の感想を述べてみたい。

「街角」の風景

ぶらぶらと街へでると、当然の事ながら、中華風レストランが目につく。しかし、カーネル・サンダース叔父さんの「ケンタッキー・フライドチキン」や「マクドナルド」のファースト・フードの店も目につく。だが、アメリカ資本に負けてなるものか、とばかり、中華風ファースト・フードの店も散見される。なんと、その名もズバリ「快餐（すぐに食べられると言う意味）」という。メニューを見ると、日本の中華料理店にあるメニューと変わりがなく、麺類や餃子やご飯ものと多少の中華風おかずが並んでいる。注文の方式は、まずメニューの中から数点を選び食券を買い求める。その食券を持ってカウンターへ行き、品物をうけとり、それぞれのテーブルに座り食事を味わう。食事が終了すると、そのまま店をでる。後は店員さんが後片付けをしてくれる。このような中国風のファースト・フードの店が北京市内で１０軒くらいあり、しかも、徐々に増えつつある、との事である。値段はそれほど高くなく、味の方もまあまあと言うところで、食事にあまり時間をかけないで、自分の時間を多く使いたい人には非常に便利かも知れない。

忘れてならないのが、日本の夜店のような、値段もすこぶるお手ごろな「夜市（屋台）」である。１つの店では、ほとんど１種類の食べ物か数種類の飲物しか売っていない。西安で『羊肉（シシカバブー）を食べたい』とわがままを言う深堀氏のリクエストにお応えし、西北大学そばの屋台へ行った時の事。「ビール」を注文すると、隣の店の女性に『ビールを持ってないか』と尋ねるといった、和気合い合いでおおらかな中国らしい風景が至るところで見受けられる。しかし、此処は中国。路上には、馬糞も見受けられ、屋台のテーブルは埃まみれで肝炎も流行しているとの事、これを続けるには、細菌にもめげない強力な胃袋と肝臓が必要であるのは言うまでもない。また、レストランに入りビールを注文すると、「瓶ビール」か「生ビール」かを尋ねられたのには、またまたびっくりした。先人達

の話によれば、中国では必ずしも衛生状態がよいとは限らないし通常ビールは冷やさない、とのこと。「生ビール」を注文するには多少の勇気が必要であったが、これがまたお薦め品。しかも、乾燥した黄色い大地で飲む冷た～い「生ビール」は、旅の疲れをいやす唯一の清涼剤であった。また、他の共産圏の国々にみられるような「買い物をする長い行列」にはあまりお目にかからなかったし、「質」を問わなければ、日常生活に必要な物は、「百貨店」や「自由市場」でいつでも手に入る、とのことであった。今や中国は、古いイメージを脱皮し新しい国家へと大きく変わりつつある、と感じた。

しかし、ここは中国・・・・・・

我々は、西安から上海へ向かうために、西安空港でチェクインし、セキュリティ・チェックを受けた時の事。深堀氏の持っているアルコールを専用に運搬するバック内の酒にクレームがついた。美しい女性の係官が、我々の前につかつかとよってきて、きれいな日本語で『バック内の酒が洩れているので機内へ持ち込むのは許されない』ときた。確かに、瓶の栓がゆるんでいるので多少の臭いはする。しかし、『機内へ持ち込むのは許されない』とはどう言うことじゃ。ここで怯んでは貴重なアルコールが蒸発するかも知れない。当然の事ながら、アルコールをこよなく愛する二人は、猛然と抗議する。『この状態で北京から持ってきたのに、何故西安ではクレームがつくのか』『機内でもファーストクラスでは酒がでるのではないですか』『何故あなた方は、我々に意地悪をするのですか』『我々は、もう西安には絶対来ませんよ』等々。しかし、返事は『これは決まりですから』『漏水不好』だけ。あまり大きな声で抗議したので、空港内の係員控室から空港係官がぞろぞろでてきて、我々をぐるりと取り囲み、段々険悪な雰囲気になってきた。仕方がない、「天皇陛下」の訪中で「中日友好ムード」が盛り上がっている時に、たかが中国酒１本で「中日友好ムード」を壊す事もあるまい、と考え、提供する事にした。古来、中国には、毒蛇を常食とする伝説の毒鳥「鴆（ちん）」という鳥がいる。この鳥の羽根を浸した酒は、猛毒を持ち、簡単に人を殺す事ができると言われている。史書にも「鴆殺（ちんさつ）」という言葉が使われている。では改めて、我々のお酒を提供しますので遠慮なく受け取り下さい。では、『中日友好のために干杯(ｶﾞﾝﾍﾟｲ)』

家族、友人、親戚一同へやっとしたためた葉書を持って北京の郵便局へ行った時の事。郵便局の窓口の係員は、お下げ髪を後ろにたらし、赤いリボンで結んだ若いお嬢さんで『小姐』と呼びかけると、にっこり笑い、頬にえくぼができる愛くるしいお嬢さんである。『こんにちわ』『日本へ手紙を出したいのですが』『航空便でお願いします』『いくらですか』『あなたは日本人ですか。全部で３．６元です』。私は早速「外貨兌換券」で３．６元を準備し、お嬢さんへ手渡した。しかし、そのお金は、再び私の手元に戻ってきた。何故、何故？！『きっとこの中国人は、日中友好のために、私の切手代をただにしてくれる

のかもしれない』なんて考えていると、お嬢さん曰く『人民元で支払って下さい』。『そんな事言われても、私は、昨日ついたばかりで、現在は、「兌換券」しか持っていないのですよ』『この「兌換券」はあなたが交換して頂けませんか』等々話をしたが、一切受け付けてもらえなかった。それを見かねた近くのおばさんが、「人民元」に交換してくれたので事なきを得た。田舎の郵便局では、「兌換券」は通用しないらしい。

中国国内の近距離の輸送機関は、主にバス、地下鉄およびタクシーである。路線バスには大型バスとミニバスがあり、大型バスは、大型のバス２台を張り合わせた二輌連結のバスで、公共汽車(ｺﾞﾝｺﾞﾝﾁｰﾁｬ)と呼ばれている。十数人乗りのミニバスは、単一目的地へ直行するバスで、小公共汽車(ｼｬｵｺﾞﾝｺﾞﾝﾁｰﾁｬ)または小巴(ｼｬｵﾊﾟｰ)と呼ばれている。このミニバスには、定員以上は乗れない。ただし、空席がある場合は、手を上げるといつでもどこでも随時停車する。「招手上車（手を上げればいつでもお乗りになれます）」と車体に書いてある。我々は、上海でこのバスを待っていた時の事、ようやく目的地へゆくバスが到着したので、そこはそれ、マナーの良い日本人のこと、降りる方が済んでから乗り始めると、なんと、座席は満杯である。我々は、仕方がなく、次のバスを待つことにした。約十分程待つと、また、バスがやってきた。今度我々は、中国人と同様にバスのドアが開くや否や、降りる人をかき分けて、全力で車内へ突進した。あるある。数多くの空席が目に飛び込んできた。我々は、座席へ腰を下ろしほっと一息をついた。これが、中国でのバスの乗り方であり、この時改めて『此処は中国である』と感じた。

万里の長城にて。
左が筆者。右は同行の深堀氏。

北京郊外の「原子能研究院」の勤務時間は、通常朝８時半から夕方４時半までである。昼休みは、午前１１時半より午後１時半までである。だが、午前１１時過ぎになると、一部のスタッフは帰宅準備を始める。しかも、１１時２０分頃になると、エネルギー節約のためいきなり停電になる。私は、この時、計算機を使用していて慌ててしまった。当然の事ながら、屋内は、うす暗くなる。中国国内の電力事情は決

して芳しいものではない。電力の節約のため省エネに徹しているのは納得できる。しかし、北京市内の「天安門」や「故宮」「長安街」や「王府井」その他北京市内の至るところが、ギンギラギンのイルミネーションに飾られている。「原子能研究院」の「招待所」の付近の公共施設でも同様である。そのエネルギーの一部でも研究施設へ回せたならば、もっと研究がやり易くなるのではないか、と考えるのは私だけではないだろう。しかも、夕方4時２０分頃になると大部分のスタッフは、帰ってしまう。しかし、多くの研究者は、その後も研究室に残り仕事をしていた。通常、夕方の7時くらいまでは、仕事をしているとの事であった。中国の計算機事情は、ご存知の通り悪く、ＥＷＳに２０台位の端末をぶら下げて使用しているので、応答が非常に悪い。「原子能研究院」の「核データセンター長」曰く『日本に行ったら彼らは１０倍くらい仕事が出来る』。話半分に聞いても5倍、これで日本人と同じだとしても、人員が5倍であるので単純に総合で5倍の仕事ができる計算である。この国の潜在能力は計り知れない。

中国人の日常生活

中国人は非常に早起きである。私が通常起きる6時か6時半頃には、「原子能研究院」の「招待所」の回りのいたるところで、老若男女を問わず、運動をしている。先ず、若者達は、「バレーボール」や「バスケットボール」さらに「バトミントン」に興じているし、また、中年や老年組は「大極拳」に興じている。「大極拳」は、百八つの型があり、先生の指導の下に全ての型を演じるそうである。同行の深堀氏も１、２度参加させてもらったそうである。中には、剣を使用し「大極拳（剣？）」を演じている組もある。さて、一汗かいたところで朝食となる。通常、この国では、食料（米や肉）が配給制である。しかし、「招待所」の回りのいたるところで「面杖(ﾐｴﾝｼﾞｬｵ)」とか「油杖(ﾕｰｼﾞｬｵ)」とか呼ばれる揚げパンのようなものや、「面包(ﾐｴﾝﾊﾟｵ)」と呼ぶパンを売っている。それらを買って朝食とするかまたは自宅で「米粥(ﾐﾝｼﾞｬｵ)」か「米飯(ﾐﾝﾌｧﾝ)」を作って食べ、学校や職場へと向かう。昼休みは、また、家へ帰り食事を済ませてから、それぞれの職場へと向かう。その時、決まって持参するのはインスタント・コーヒーの空き瓶の様なものである。その中にお茶を入れて持ち歩き、随時喉の乾きをいやしている。これは、乾燥した大地の必需品である。また、独身者や単身者の食事は、丼ぶりや小さな洗面器のような器を食堂へ持参し、ご飯におかずをのせた、いわば「中華丼」を買い、路上で食べる。夕食後は、勉強するか映画を見たり、テレビを見たりして過ごす。ただし、独身者には、男女の交際範囲を広めるためか、時々「跳舞（ダンスパーティー）」が公共食堂で開催される時もある。

情報が少ない国

情報を入手する手段は、新聞やラジオやテレビである。朝刊は、北京では「人民日報」、

「光明日報」、「北京日報」、「工人日報」であり、テレビは中央電子台が３チャンネル、北京電子台が２チャンネルで他に天津電子台や河北電子台があるがいずれも情報量が少なく、共産党関係のニュースしか放送しない。ただし、大きなホテルでは、日本のＢＳ放送が副音声のみで見る事ができる。したがって、それ以外の情報を得る最も重要な場は、パーティや買い物での立ち話等である。ぶらぶらと街を散歩していて良く見かける光景は、中国人同士、うるさいくらい『ぺちゃくちゃ』おしゃべりしている光景である。その内容は、食事の事、映画や音楽の事、人の噂等で政治の話はあまりしない。また、中国人の家庭へ招待されたならば、特別の用事が無い限り断ってはいけない。その場は、前述のごとく重要な情報交換の場であると共に、「お互いにより緊密な関係になった事のある種の確認の場」でもある。

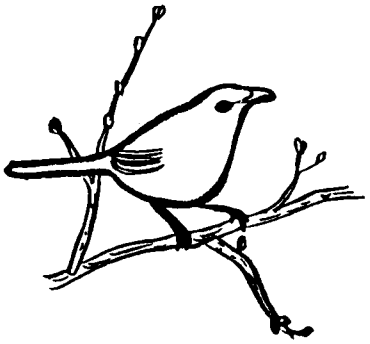
ちなみに、日本の「天皇陛下」一行が北京に滞在している間に、我々も北京に滞在していた。しかも、晩餐会や各種の歓迎会等に出席していろいろなお言葉を述べられた、との報道は知っていた。しかし、今日どこそこへ何時頃行くというニュースには、中国ではお目にかからなかったし、天皇陛下のＴＶのニュースはほんの一瞬流れたものの、昨日のニュース？でしかなかった。

<u>盛んな日本語熱</u>

我々が滞在した期間中に、第１４回共産党大会が開催され、「社会主義経済体制の建立」が盛り込まれた。これは「市場経済体制への移行」で、中国の経済システムを国際仕様に合わせるという事である。その一つとして、「日本の経済を多いに学ぶ」事であると言う方針が出されたらしい。一方、この期間は天皇の訪中を始め、日中国交正常化２０周年にあたる年で、何かと日中関係がにぎやかな時期であった。さらに、現在、世界中で日本語の学習者は、約１００万人でその内の約三分の一の２９万人弱は中国人である。それらの影響かどうか判らないが、日本語を学んでいる多くの人たちに出会った。例えば、「原子能研究院」では、

ＣＯＤＡＴＡ会議が開かれた北京飯店のドアガールと。

于 保生氏の隣の席の博士課程の学生さんや我々の面倒を見てくれた物理部の衛 玲（Wei Ling)女史、さらにＣＯＤＡＴＡ会議の秘書で非常に英語の達者な除 莹（Xu Ying)さんなどである。私も、中国で「中国語会話」のカセットテープを買い求めたが決して安いものではなかった。それは、中国人の月給の約半分の価格であった。中国で外国語を学ぶことは、大変お金の掛かることである。それほどまでして日本へ関心を持つのは、やはり「黄金の国・ジパング」へ憧れているからか、それとも純粋に日本へ関心があるからかは、私には判断できなかった。

我々は、中国滞在中に多くの中国の人たちと話をする事が出来た。特に、「原子能研究院」や各大学の「招待所」で接した服務員や管理人の人たちは、一様に「初めて日本人と話した」事に感激していた。しかも、中国の人たちは、常に「前事不忘、后事之師（前の事を忘れず後の戒めとする）」の精神で、我々に接してくれた。さらに、私のつたない中国語に耳を傾け、にこにこと話しかけてくれたり、こちらのわがままともいえるよう様な要求を嫌な顔もせず満たしてくれたり、中国滞在中は、いろいろな人達に非常にお世話になった。

最後に、我々の滞在中に、色々めんどうを見てくれた「原子能研究所」の于 保生氏や衛 玲女史、ＩＡＰＣＭの田 東風氏や孫衛力(Sun Weili)氏、ＣＯＤＡＴＡの除 莹小姐、复旦大学大学院生で美人の案内嬢の金 小姐、その他、関係機関の多くの方々に深く感謝いたします。